

Title	ドストエフスキイとムイシキン
Author(s)	武藤, 洋二
Citation	大阪外国語大学学報. 41 p.69-p.81
Issue Date	1978-02-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80700
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ドストエフスキイとムイシキン

武 藤 洋 二

Достоевский и Мышкин

Yoji MUTO

1

外国で治療したおかげで、「ほとんど白痴でなくなった」ムイシキン公爵は、ロシヤの生活を経験すると、完全な白痴にもどってしまう。

この「ほとんど白痴でない」人間が、完全な白痴になるまでの過程が、ドストエフスキイの小説『白痴』の作品世界である。

スイスの田舎で金銭とは縁のない生活をしていた、子供のように純粋な青年ムイシキンの前に、ロシヤの資本主義社会は、金銭が点となり、やがて線になり、網になることによって、その姿をあらわしていく。

この金銭の網は、ナスターシャという女性を捕えるために、あまれている。

ナスターシャは、みなし児だった。彼女は、トツキイという金持にひきとられた。彼女は成長し、絶世の美女になった。トツキイは、彼女を情婦にした。彼は、何年間も彼女をかこったあとで、彼女をすてて、大実業家のエパンチン將軍の娘と結婚しようとする。このため、彼は、手切れ金として彼女に75,000ルーブリやろうと考えている。

この金額は、ナスターシャの青春に対する値段である。彼女の青春をうばった彼は、この金額でけりをつけようとする。

この金に、ガーニヤ・イーヴォルギンという青年が目をつける。彼は、エパンチン將軍の秘書である。彼の人生の目的は、「ユダヤの王」、つまり、ロスチャイルドのような大金持になることである。「ユダヤの王」になるためには、元手がいる。彼は、1カペイカから始めて、ひどい苦勞のあげく60,000ルーブリの金持になった男を知っている。彼は、「ユダヤの王」への道をこのようには始めたくない。彼は、裸一貫から出発するのではなく、資本をもって第一歩をふみだしたい。元手づくりの苦勞をしないで、小さな金持として出発し、大金持になるのが、彼の願望であり、人生の計画である。

ナスターシャが手切れ金として受けとる75,000ルーブリをよこどりすれば、彼は、元手づくりの苦勞をまぬがれる。彼は、ナスターシャの青春の代金によって、大金持への道をあゆもうと考

える。彼は、ナスターシヤの青春を自分の元手に流用するために、彼女と結婚しようとする。

ところが、ロゴージンという金持の青年が、ナスターシヤを手に入れようとねらっている。ロゴージンは、ナスターシヤがガーニヤの手におちるのをさまたげるために、彼女の前に金をつむ。

ガーニヤは、金を得るためナスターシヤを手に入れようとし、ロゴージンは、ナスターシヤを得るため、金をだす。

ロゴージンは、ナスターシヤに手始めとして18,000ルーブリだそうとする。次に、40,000ルーブリまで引き上げ、最後に、100,000ルーブリという値段を彼女につける。彼は、ナスターシヤの意志を100,000ルーブリで自由にしようとする。

ナスターシヤを、このような露骨な数字がとりかこむ。

この金銭の網にひっかかった「つばき姫」を中心にして、ロシヤが、ムイシキンの前に姿をあらわしていく。

2

このような状況にあるナスターシヤの前に、ムイシキンがあらわれる。

ムイシキンの人間的特徴は、一つの挿話によって、あらかじめ示される。

彼は、精神病の治療のために、スイスの村にいた。そこにマリという娘がすんでいた。彼女は、ある男に誘惑され、すてられた。村人は、彼女を罪のある、汚れた女としてさげすんだ。彼女の母親も彼女に冷たくあたった。村の子供たちも彼女をいじめた。ムイシキンは、「彼女を、罪のある女ではなくて、ただ不幸な女だとみなしていた」⁽¹⁾。苦しんでいる人間に、罪ではなくて不幸を見るムイシキンの感化をうけて、子供たちは、彼女に石を投げるのをやめた。子供たちは、彼女をあわれみ、愛するようになった。彼女が病気で死んだとき、子供たちは棺を花でかざった。

この挿話は、ムイシキンの二つの特徴を語っている。それは、苦しんでいる人間に対する態度と、子供たちとの関係に、あらわれている。

苦しんでいる人間に対して、彼はその苦しみを分つ。

子供たちに対して、彼はその仲間としてむかう。

彼は、マリをいじめる村の大人たちとは決して一緒になれない。彼は、大人たち、つまり、「人びと」と一緒にいるのは嫌いだ、という。「嫌いです。なぜなら、その能力がないからです」⁽²⁾と、彼はつけくわえる。

彼は、「人びと」からずれた、社会からうきあがった人間として、挿話のなかで活躍する。彼の子供っぽさは、社会からの距離を示す。

ドストエフスキイは、ムイシキン⁽³⁾を「極めて美しい人間」として登場させた。この美しさの内容は、まず、資本主義社会の悪に全然よごれていないことにある。「美しい人間」とは、金銭の網をあむ「人びと」、大人たちの対極の存在である。それは、金の支配に一切かわりのない人間である。

このことは、彼が現実の悪に手をかしていない子供たちの一員である、ということによってあらわされている。

ムイシキンの子供っぽさは、したがって、現実社会の悪と対立する。

キリストは、子供たちについて、「神の国はこのような者の国である⁽⁴⁾」と、いった。ここでは、子供たちは、現実の悪が一掃されている「神の国」という理想社会の住人になれる資格を、あたえられている。これは、ドストエフスキイの意図と重なりあう。彼は、現実の悪と、その悪の存在しない理想社会との両方をにらみながら、ムイシキンに子供っぽさをあたえた。

ドストエフスキイは、ムイシキンを子供の変種にした。このことによって、ドストエフスキイは、ムイシキンを理想社会とむすびつけた。

ある登場人物は、ムイシキンが「牧夫のように生活を見ている⁽⁵⁾」と、いった。牧夫のような見方とは、金銭の支配と階級の抑圧のない所で可能な牧歌的な見方である。

ムイシキンは、「黄金時代でも聞いたことのないような純朴さ、汚れのなさ⁽⁶⁾」をもっている、といわれる。黄金時代とは、牧歌的な生活が可能な無階級社会があった、と考えられる幻の時代である。

ドストエフスキイは、『白痴』の四年前に発表した『地下室の手記』で、空想的社会主義の理論が生みだした理想社会像をこきおろしながら真の理想社会へのあこがれを強くもっている主人公を、えがいた。⁽⁷⁾この地下生活者のあこがれを、ドストエフスキイももっていた。このあこがれは、『白痴』をとびこえて、『悪霊』、『未成年』、『おかしい人間の夢』のなかに理想郷の光景を登場させた。⁽⁸⁾『白痴』では、まだその図はえがかれぬ。その代りに、ドストエフスキイは、理想郷への橋わたし役を登場させた。それが、ムイシキンである。

階級社会の悪が全然ない理想の地への橋わたしをする資格のある者は、現実の悪に汚れていないだけでなく、その理想社会の人間関係の原則を体現している人間である。ドストエフスキイの理想の人間ムイシキンは、あとでのべるように、ドストエフスキイが胸にいだいていた理想社会の住人である。

彼が、『白痴』で、えがくことを目的にした「極めて美しい人間」とは、彼の理想社会の人間的表現である。ドストエフスキイは、理想社会像を人間像として呈出したのである。

ムイシキンと他の人間との関係は、理想社会と資本主義社会との関係の表現である。これは、無階級社会という理想と、資本主義社会への反逆とを展開する軸である。

『白痴』は、ドストエフスキイの主な作品がすべてそうであるように、理想と反逆の作品である。

ドストエフスキイは、理想社会の住人を資本主義社会へおくりこむ。

ナスターシャが金額の数字でとりかこまれている社会へ、ムイシキンのような人間をおくりこむには、装備が必要である。それがなければ、ムイシキンは、異分子として、すぐにはじきだされてしまう。

ドストエフスキイは、ムイシキンを白痴にする。ムイシキンが、すでにのべた意味での子供っぽさをもっていること、「神の国」の住人としての子供の変種であること、いいかえれば、ドストエフスキイの理想社会の住人であることは、現実社会では、白痴としてしかおさまりがつかない。

ドストエフスキイは、したがって、自分の理想の人間を精神病患者の患者にして、資本主義社会へおくりこむ。

白痴は、ドストエフスキイの理想をつつむ現実のころもである。主人公が精神病患者であることは、現実に対する譲歩であると同時に、皮肉と抗議をあらわにふくんでいる。

このようなムイシキンは、ドストエフスキイにあっては、当然、イエス・キリストと重なりあう。ドストエフスキイにとって、最もすばらしい、美しい人間は、あとでのべるように、イエスである。

ムイシキンは、ドストエフスキイの幻想的な無階級社会の住人と、「神の国」につながっている子供の変種と、イエスとの組合せである。

ドストエフスキイがよりどころにし信仰しているこの三つの要素をかねそなえる人物は、彼のイデオログになれる。それは、彼の使者として働くことができる。

ドストエフスキイは、ムイシキンを自分の使者として、資本主義ロシアの中心ペテルブルクへ派遣する。

「人びとと居る能力のない」ムイシキンは、いう——「今、わたしは、人びとのなかへ入っていくのだ⁽⁹⁾」。

ドストエフスキイは、生身の理想を資本主義社会のまっただ中へ放つことによって、一つの実験をおこなう。これは、現実の葛藤のなかで自分の理想的人間がどういう力を発揮しうるかを、みきわめるための実験である。

3

ナスターシャは、すべてをかなぐりすてて、裸一貫で新しい生活をしたと思う。自分が身一つになったときに、手をさしのべてくれる人間がいるだろうか、と彼女は考える。

「無一物の自分を誰れがもらってくれるだろうか⁽¹⁰⁾」と、ナスターシャはたずねる。

彼女は、金の世の中から手をさしだす。理想郷から来た人間が、手をさしのべる。

「公爵がもらってくれるよ」と、だれかがこたえる。

「『本当?』と、彼女はたずねた。

『本当です』と、公爵は小声でいった。

『あるがままの、無一物のわたしを、もらってくれるのですか!』

『もらいます、ナスターシャ・フィリーポヴナ……』⁽¹¹⁾

ナスターシャは、ここで始めて、自分を売買の対象にしない人間を見る。彼女の前に「美しい人間」が立っている。彼女は、金銭を媒介しない人間関係の戸口にいます。

ムイシキンの出現は、彼女にとって、大きな意味をもつ。何ももたない、ありのままの人間を引き受けてくれる者がこの世に居るということが、彼女をはげます。彼女は、「美しい人間」に出会ったのである。

ムイシキンに、とつぜん莫大な遺産がはいることになる。ナスターシャは、大金持の公爵夫人になれる。しかし、過去をもつ彼女は、自分をムイシキンにふさわしくない人間だと思う。彼女は、彼からしりぞこうとする。彼女は、自分をムイシキンと同列におくことができない。「美しい人間」にふれることによって、自分の過去を強く意識する。ここから、ムイシキンを前にして、ナスターシャの自主規制の苦しみが始まる。

ナスターシャは、「美しい人間」の美しさを、自分が汚してしまうのをおそれる。彼女は、ムイシキンには、エバンチン将軍の娘アグラーヤがふさわしいと思う。彼女は、身をひくことによって、ムイシキンを大切にしようとする。

ナスターシャは、自分にさしだされたムイシキンの手をふりはらうことにする。

「百万ルーブリと公爵の位を踏みつぶしてやった。」⁽¹²⁾

遺産相続で大金持になるムイシキン公爵をすらすらでにしたというにせの強がりを出すことによって、彼女は、一挙に自分の金銭の網の破かいへとつき進む。

ナスターシャは、ロゴージンがさしだした100,000ルーブリの札たばを火の中へ投げ入れる。彼女は、その札たばを素手でつかめば、くれてやる、とガーニヤにいう。

ガーニヤは、極度に興ふんする。「ユダヤの王」を夢みる青年にとって、この札たばは強烈な引力をもつ。「ユダヤの王」になるための準備金が、目の前にある。しかし、もえてしまいそうになる札たばを見ながら、彼は、手をだすことができない。自尊心が紙一重の差で金銭欲に勝つ。ガーニヤは、この二つのもののせめぎあえに耐えきれず、卒倒する。

ナスターシャは、ガーニヤが札たばをつかんだからではなくて、つかめなかったのも、その金を彼にやる。それは、金銭よりも強いものが、たとえ一滴でもガーニヤのなかにあったことに対する褒美である。

ナスターシャは、このような芝居がかった方法で、金銭の万能さを否定し、金銭を超越し、金銭から自由になろうとする。

これは、金銭の網をやぶるための儀式であった。

ナスターシャは、トツキの手切れ金もことわり、自分の体に押された数字をけしきった。彼女は、去りぎわに、ムイシキンにいう。

「始めて人間を見ました。」⁽¹³⁾

自分の新しい生活のためにおこなった儀式によって、「つばき姫」から人間になったはずの彼女は、しかし、自分の発見した「人間」と対等にふれあうことができず、ただそれに出会ったという成果だけを手にして、ロゴージンをつれて姿をけす。ロゴージンは、しかたなしに彼女がえらんだ道ずれである。

あとに、「人間」ムイシキンが残る。この「人間」の美しさは、これから始まるナスターシャの苦しみによって試される。ドストエフスキイの理想社会の人間が、現実社会の人間の苦しみによって、ゆさぶられる。このことによって、彼の美しさの実体が、いやおうなしに、あきらかになっていく。

4

「人間」ムイシキンをめぐる、ナスターシャの動揺と分裂が始まる。

彼女は、自分が悪いのではなく、犠牲者なのだと思うこともあるが、しかし、自分を「一番墮落した女」という意識から解放されない。このため、自分を「人間」からひき離そうとして遠ざかるが、心は「人間」の方にかたむく。

ナスターシャは、ムイシキンとロゴージンとのあいだで、つまり、「人間」と単なる身のおき場とのあいだで、ゆれ動く。

彼女は、ロゴージンという身のおき場をむりに永久の住家にかえることによって、自分の心と行為との分裂に終止符をうとうとする。

彼女は、ムイシキンにアグラーヤを、自分にロゴージンを結びつけ、この組合せを固定化することによって、自分の動揺の苦しみにけりをつけようとする。

このため、彼女は、ムイシキンとアグラーヤの結婚に「自分の解決のすべ⁽¹⁴⁾て」がある、とアグラーヤに書く。

ナスターシャの美貌について、「そのような美しさがあれば世界をひっくりかえせる⁽¹⁵⁾」といわれたことがある。ところが、彼女は、⁽¹⁶⁾「世界から手を引いた」。彼女にとって、世界をあきらめるとは、「人間」をあきらめることであった。彼女は、自分が自分自身のぬけがらであることをアグラーヤに告白している。

ナスターシャが「世界から手を引いた」ままで存在しつづけるためには、ロゴージンが、そのおしつけられた役に耐えつづける必要がある。ロゴージンは、彼女の動揺・分裂にふりまわされている。彼女に狂恋しているロゴージンは、それに耐えつづけることはできない。

ナスターシャは、これを知っている。彼女は、心がムイシキンにむかい、身をしかたなしにロゴージンにもたせかけている状態は、ロゴージンによって終止符をうたれるだろう、と予感している。

ロゴージンは、ムイシキンに刃をふりあげる。殺人は未遂におわる。この刃の先は、恋がたきから恋人へうつる。ナスターシャは、それがいつか自分にせまってくるだろうと予感しながら、その刃をさける試みを一切しない。

ナスターシャは、ロゴージンと結婚式をあげようとするが、その場になると逃げだす。そして、再びロゴージンのところへまいもどる。彼女は、これをくりかえす。

ナスターシャは、したがって、ムイシキンとアグラーヤを結婚させないと、ロゴージンのとこ

ろにとどまることはできない。このため、彼女は、二組の結婚のおぜんだてをする。

ムイシキン、ロゴージン、ナスターシャ、アグラーヤが会う。この場で、アグラーヤはナスターシャを侮辱する。ナスターシャは、ムイシキンとアグラーヤを結婚させる計画をわすれて、自分が命令すればムイシキンは自分と結婚するだろう、とさげんでしまう。

ナスターシャは、ロゴージンに、立去れ、必要はないんだ、とどなってしまう。

身のおき場をすてさり、「人間」と共に生活するという自分の願望の現実性をナスターシャは信じていない。しかし、「たとえ一秒でもいいからこの瞬間をひきのばし、自分をいつわりたいと願う⁽¹⁷⁾」。彼女は、ロゴージンが必要でない、ということは、非現実的だと知っている。それを承知しながら、この非現実性を信じたい。自分をいつわる、とはこのことである。

彼女が張りめぐらした「解決のすべて」という幕を破って、彼女の本心がおどり出てしまった。彼女は、賭ける。彼女は、もしも今ムイシキンが自分を取り、アグラーヤをすてなければ、ムイシキンなどいない、という。

ナスターシャの賭は、彼女の苦しみの発作的なあらわれである。

ムイシキンは、苦しんでいる女から、態度決定をせまられる。

ムイシキンが「美しい人間」であるのは、まず第一に、彼が他人の苦しみを自分の苦しみとして苦しむことができるからである。彼の美しさの核は、共に苦しむことにある。

したがって、ナスターシャが自分の苦しみをおおっていた「解決のすべて」をはぎとって、ムイシキンの出方をまっているとき、彼の美しさが試されているのである。他人の苦しみに対する彼の美しさの有効性が、問われている。

苦しみをつきつけられたムイシキンは、一瞬たじろぐ。アグラーヤかナスターシャか、という選択をせまられて、彼は、すぐに口もきけない。この一瞬の不決断がアグラーヤには耐えられない。彼女は部屋からとびだす。ムイシキンは彼女をおいかけようとする。彼がアグラーヤを選んだのかと思ったナスターシャは、衝撃をうける。彼女は敗北に耐えきれず、気を失う。息をふきかえたとき、ムイシキンがいるのを見て、「私のもの」とさげふ。

ナスターシャの処理方法は、ごはさんになった。彼女は、ムイシキンのふところに入り、自分自身ではめていた枷を解きはなった。

ムイシキンは、とびこんできた不幸な女をうけいれた。彼は、アグラーヤを異性として愛していた。彼は、ナスターシャを異性の愛ではなくて、「あわれみによって愛していた」。だから、彼は、不幸な女をうけいれたというよりも、彼女の不幸をうけいれたのである。

ナスターシャは、ムイシキンの花嫁になる準備をする。彼女は、始めて幸福になる。

ところが、結婚式の直前に、ナスターシャはぬけだし、群衆の中へとびこむ。人ごみの中にいたロゴージンに、彼女は、「助けて！連れ出して！どこへでもいいから今すぐ！」と、さげふ。⁽¹⁸⁾

ナスターシャは、自分の願望が成就する決定的な転換の瞬間に、元の自分へ、解放前の自分へ逃げ帰る。「人間」に対する彼女のひけめは、彼女を元へもどしてしまう。

彼女は自分の苦しみを、ロゴージンによって処理することもできず、ムイシキンによって解決することもできない。

ナスターシャは、再びロゴージンという身のおき場に帰る。

元のもくあみから新しい幸福はありえない。

ロゴージンは、再びナスターシャの苦しみをせおう。彼は、ナスターシャの動揺にけりをつけることによって、自分の立場の苦しみを消す。彼は彼女を殺す。

ナスターシャは、彼の刃を予知しながら、彼に身柄をあずけていた。彼女は、したがって、一種の自殺をしたのである。これが彼女の「解決のすべて」になった。

5

ムイシキンには、かなり前から、ロゴージンがナスターシャを殺すことが分っていた。それを知りながら、彼は、ナスターシャを助けることができなかった。ナスターシャは、ムイシキンに「人間」を発見したが、その「人間」は彼女を救わなかった。

ムイシキンは、ナスターシャの死に衝撃をうけて、完全な白痴にもどる。彼は、人の見分けもつかない痴呆状態におちいり、スイスへおくりかえされる。

ムイシキンから去ったアグラーヤは、他の男と結婚する。その男は、全くの食わせ者であったことが分る。

ナスターシャは殺され、アグラーヤは不幸になり、ムイシキンの「美は世界を救う」⁽¹⁹⁾どころか、最も身近な人間すら助けることができず、自分自身は廃人になってしまう。

「美しい人間」は、退場し、アグラーヤの父で大実業家のエパンチン将軍に代表されるブルジョア社会が、ムイシキンの登場と退場には全く無関係に、圧倒的な力で存在しつづける。それは、ゆらぐことのない現実として、作品世界をおおっている。それは、さまざまな人間に次から次へと新しい金銭の網をかぶせていく場である。

ムイシキンは、牧歌的な村からやってきた。その村は、金銭のペテルブルクの対極として象徴的な意味をもっていた。それは、階級社会の悪を感じさせない幻想的で、あいまいな場所であった。ムイシキンは、村でほとんど白痴がなおり、ペテルブルクで完全な白痴にもどる。このことが、両者の対極的なちがいを総括する。

ムイシキンは、村を出て、汽車でペテルブルクへやってきた。この汽車は、一つの意味もっている。汽車の中で彼は、「ここではわれわれはお金を信じています」⁽²⁰⁾という文句を耳にする。汽車は彼にペテルブルクを紹介するのである。

汽車は、全く異なる二つの世界を結ぶ、おとぎ話にでてくる通路に似ている。その通路をくぐっていくと、別の世界へ入りこむ。通路は、あまりにもちがいがすぎて、すぐには慣れることのできない別の世界へ入るための手段である。作品は、この通路から始まる。作品の向うには、村という世界がひかえている。それは、ドストエフスキイの理想郷そのものではないが、その変種、

その代理店のようなものである。ムイシキン、ドストエフスキイの観念上の理想郷で生れ、作品世界におけるその仮普請の中継所である村からやってきたのである。通路は、ムイシキンが別世界から異分子としてブルジョア社会へ入っていくことを暗示する。

この異分子は、ブルジョア社会の悪に対して解毒剤の役をはたすはずであった。ところが、彼は、自分がその悪をもっていないだけであり、その悪に手をかさないだけであり、それを解毒する能力は、結局、なかった。

ムイシキンは、金銭による人間の結びつきに対して、共に苦しむという人間の結びつきを対置した。このことによって、彼は美しい。彼の美しさの実体がここにある。ここからナスターシャは「人間」を発見した。

この「人間」は、しかし、共に苦しむ姿勢を具体的な建設的な行動へと結実させることはできない。その「人間」は、苦しんでいるナスターシャの心に光となって入りこむだけである。そして、その光は、結果的には、彼女を苦しめる。

ムイシキンの光は、ブルジョア社会の犠牲者にしみ通るだけであり、加害者たち主人たちには入りこまない。彼の美しさは、加害者たちに一つの印象をあたえるが、それは、一種の清涼剤としてであり、解毒剤としてではない。

村では一つの実をむすんだムイシキンの美しさは、村の中でしか力をもたない。それは、ブルジョア社会の原則が支配しない所でしか真の力を発揮できない。通路を通してブルジョア社会にくと、それは、現実の葛藤のなかで無力さをあらわし、美のしかばねが村におくりかえされる

『罪と罰』では、ソーニヤは、ラスコーリニコフの苦しみを自分も背おい、彼と一体化しようとした。苦しみを通しての一体化に、ラスコーリニコフを変えてしまう力をあたえるために、ドストエフスキイは、強引に終章をつけくわえた。

ところが、『白痴』では、ムイシキンに対して、作者のこのような後だてではない。作品は、悲劇のままでおわる。ドストエフスキイは、自分のえがきだした現実が自分の理想的人物を押しつぶしたままで、作品を終えた。彼は、ムイシキンにそれをはねかえす力をあたえることはできなかった。

ドストエフスキイは、『ドン・キホーテ』を極めて高く評価し、ドン・キホーテという人物の美しさを強調した。そのさい、彼は、「美しい人間」につきまとう一つの悲劇を指摘した。

「人間のこの上もない美しさ、この上もない清らかさ、汚れのなさ、純朴さ、柔和さ、勇気、そして最後に、この上もない知性——これらすべては、ときどき、（ああ、非常にひんぱんにすら）何にもならず、人類に益をもたらすことなくすぎ去っていく。⁽²¹⁾」

ドストエフスキイのこの言葉を、ドン・キホーテからムイシキンに移すことができる。ムイシキンの人間性も、ロシアを通りすぎていくだけである。

ドストエフスキイは、ドン・キホーテに関連して、さらにもう一つのことを指摘する。上記の

美しい人間的特性は、「人類によるあざけり」をうけることがある。なぜならば、その「美しい人間」に一つ欠けているものがあるからである。それは、上記のすばらしい人間的特性のもつ威力を、「行動の、正しい幻想的でない狂的でない道へ、人類を益する方向へむける」ための「天才」である。この「天才」がないため、「美しい人間」は、あえなく倒れ、彼の「むなし破滅の光景」は、「もはや笑ではなくて、にがい涙」をさそう。

ムイシキン¹は、まさにこの「天才」を欠いている。ドストエフスキ²は、この「天才」をもたないドン・キホーテ³の物語を「もっとも物悲しい本」とよんだ。そして、自分の『白痴』もまた物悲しい本にしてしまった。

ドストエフスキは、「幻想的な道」でなく、具体的で実際的な行動の道へ「美しい人間」をむけることはできなかった。彼には、社会改造の具体的な有効な理論と方法がなかった。ある意味では、彼は、それをもとうとはしなかった。

ドストエフスキは、今までの空想的社会主義者たちのどのような理論にも満足できなかったばかりか、理論は、それが理論であるかぎり、それ自体が生身の人間に対して危険性をはらんでいる、と考えていた。

理論がいだく人間像と実際の生身の人間との間のずれが、生身の人間に対する危険性の源である。この危険性をさけようとすれば、理論で主張しないで、生身の人間そのものを呈示しなければならない。ずれがあるかぎり、そうせざるを得ない。ここで、理論代りとしての生身の人間の必要性がでてくる。

ドストエフスキは、シベリヤで空想的社会主義の理論をすてた。しかし、彼は、空想的社会主義の目的をすてることができなかった。今までの階級社会の悪を一掃した理想郷の夢を、ドストエフスキは、一生いだきつづけた。彼は、自分の論敵である空想的社会主義者たちと、あこがれを共有していたのである。

しかし、彼は、空想的社会主義者たちが、あこがれの地にむけて立てかけようとしていた理論のはしごを自分でたたんでしまった。彼は、自分の批判の対象である地下生活者にも、目的地までは全然とときようもない貧弱な、時には夢のかけ橋のような幻想的なはしごを、かたづけさせた。

ドストエフスキは、あらゆる理論と、その理論がつくりだした社会の設計図とをとりぞいてから、自分のあこがれの地をおおぎ見た。現実とその地との間のすさまじい距離を埋めるものとして、彼は、理想的な生身の人間をおいた。

この人間は、そのあこがれの地の住人がもっている特性をそなえていなければならない。その特性が理論代りをするのである。したがって、その人間は、理想の地の住人でなければならない。それは、「極めて美しい人間」である。『白痴』においては、それは、ムイシキンである。

ムイシキンは、社会改造の理論代りをする生身の理想である。

ムイシキンの美しさは、したがって、一つの主張である。ドストエフスキは、この美しさを

示すことによって、人間が変るべき方向、理想社会の住人への方向を示唆する。

しかし、ムイシキンには、あの「天才」があたえられていないために、彼は、理想のための行動を組織することはできない。ドストエフスキイは、理論を排除することによって、この「天才」を欠けたままにしておいた。彼は、「天才」を、ムイシキンにあたえないし、あたえることができない。

ドストエフスキイが、『白痴』において、理論代りに生身の人間で主張する、もう一つの理由がある。それは、人間が、自分の理論、自分の信念にもとづいて行動するさいの危険性である。人は行動するさいに、自分の行動のもとになるものが正しいかどうか、たえず、問わなければならない、とドストエフスキイはいう。人は、自分自身を点検してくれるもの、自分自身を点検するよりどころになるものをもたなければならないと、彼は考える。その役割をはたすことができるのは、イエス・キリストだと、彼は信じている。

例をあげれば、こうなる。

「キリストは、異教徒を火あぶりにするだろうか。いや、しない。だから、異教徒を火あぶりにすることは、非道徳的な行為である。」²²⁾

ドストエフスキイは、「道徳とは、内的な信念に従うことである」²³⁾という考えに同意できない。人間は、自分の信念に従って、すべてを行いうる。人間が自分の信念、自分の良心に従って行動するとき、その信念や良心に歯どめがなければ、その人間は、「良心に従って」殺人すらおかすだろう、とドストエフスキイは考える。

『白痴』をかく前に、ドストエフスキイは、『罪と罰』で「良心による流血」を追求した。そのさい、彼は、人間の良心に対する歯どめを求めた。彼にとって、それは、まず、神であった。

「神のない良心は恐ろしいものだ、それは、もっとも非道徳的なところにまで迷いこむだろう。」²⁴⁾

ドストエフスキイは、歯どめのついた良心、神をもった良心を要求する。

しかし、実際には、歯どめの役をなしうるもの、人間がそれに従って自分を正すことができるもの、自分を点検するよりどころになるものは、抽象的な神ではなくて、具体的な存在でなければならない。その行動が知れわたっており、それを手本にできる、かつて生きていた生身の人間でなければならない。その人間は、神にもっとも近い、特別な唯一者でなければならない。それは、自分のために他人の血を流した「良心による」殺人者ラスコーリニコフとは正反対に、他人のために自分の血を流したイエス・キリストである。

ドストエフスキイにとって、人間の良心に歯どめをかける唯一の有資格者は、イエス・キリストである。

「道徳上の模範で、理想の人間は、わたしには一人いる。キリストである。」²⁵⁾

『白痴』において、彼は、主人公をこのキリストと重ねあわせたのである。このことによって、主人公は、理論代りになれたのである。と同時に、主人公は、あの「天才」がないままに滅びてしまったのである。

イエス・キリストをよりどころにすることは、ドストエフスキイがいうように、「哲学ではなくて、信仰」である。それは、理論や理くつではなくて、信じることである。イエスやイエスに近い人間が、あの「天才」をもっていなくても、ドストエフスキイにあっては、理想の座から転落しない。彼は、『白痴』でムイシキンの無力さを明らかにしながらも、この人物に対する信仰はゆるがない。この人物に代るものを、彼はもっていないし、もとうとはしないので、この人物に対する信仰に生きる以外に道はなかった。

神とイエス・キリストを信じながら、ドストエフスキイは、この両者が、作品世界の現実のなかで無力であることを暴露してきた。この矛盾は、ドストエフスキイに一生についてまわった。

これは、『白痴』を悲劇にした。

無力な理想は、ナスターシャの反逆をささえることはできなかった。

ナスターシャの反逆の方向と、ムイシキンの理想の方向とは、一致するはずであった。それは、ともに、人間解放への動きであった。

ところが、理想は反逆を導くことができず、一方、反逆は理想から遠ざかった。理想と反逆は、その出会いにおいて、呼応しただけで、結局は、それぞればらばらに破滅してしまった。

『白痴』は、こうして、悲劇になった。

理想と反逆のすれちがいは、ドストエフスキイの文学をつらぬく悲劇的特徴である。『白痴』は、これを、あますところなくさらけだしたのである。

注

- (1) Ф.М.Достоевский. Полное собрание сочинений в тридцати томах, т.8. „Издательство “Наука”, Л., 1973, стр.60.

以下、『白痴』からの引用は、この本のページ数のみを示す。

- (2) 63
- (3) ドストエフスキイは、1868年1月13日付ソフィヤ・イヴァノヴァあての手紙のなかで、「『白痴』の中心思想は、極めて美しい人間をえがくことです」と書いている。
- (4) マルコによる福音書第十章
- (5) 257
- (6) 258
- (7) この点については、「ドストエフスキイの文学と埴谷雄高氏の方法」（『文化評論』1973年9月号）のなかで書いたので、参照して下さい。
- (8) ドストエフスキイの理想社会の問題については、「ドストエフスキイと理想社会」（『文化評論』1975年3月号）で論じたので、参照して下さい。
- (9) 64

- (10) 138
- (11) 同上
- (12) 143
- (13) 148
- (14) 380 強調は引用者。
- (15) 380
- (16) 同上
- (17) 474
- (18) 493
- (19) 317
- (20) 6
- (21) Ф.М.Достоевский. Об искусстве, Издательство "Искусство",М., 1973, стр.325.
- (22) Неизданный Достоевский.Литературное наследство,т.83,Издательство "Наука",М.,1971,стр.675.
- (23) 同上
- (24) 同上
- (25) 同上
- (26) 同上